

## 三、利他方便

## (1) 巧方便回向

浄土論には

「如是成就巧方便回向」

と示される。已に、善功摂化が、浄土の広略の徳を止観相順修行することによって、柔軟心を成就することによって得られることを説かれた。今それを受けて「如是」と云い、成就巧方便回向と示されたのである。論註にはこれを釈して

「如是者、如前後広略皆実相也」

と言われる。

如是とは、前の如実知を標すのである。成就とは、正しく後の巧方便を標すのである。前後広略とは、前とは観行体相章に示されたる二十九種莊嚴の広説のこと、後とは、次の浄入願心章に示されたる一法句の略説、広略二説も、皆是れ実相である。この広略二相皆実相なるを「是」と云い、眞実智慧がこの境に契うを「如」と謂うのである。「如是者、如前後広略皆実相」の意、了解せられたことと思う。

前において、浄土の略相を、一法句と言われることについて説いておいたが、浄入願心章には「一法句とは謂く清浄句、清浄句とは謂く、眞実智慧・無為法身なるが故に」と説かれてある。如来浄土の略相とは実に、眞実智慧、無為法身である。眞実智慧こそは、無為法身、即ち真相を照らす光である。その眞実智慧こそは、やがて盡十方無碍光の体であり、無為法身こそは、無量寿の体である。この光寿二無量こそ、一切莊嚴の根本をなすもの、如来の大功德である。この智慧こそ平等一如の実相を知る眞実智慧である。二十九種の広相といえども、悉くこの、眞実智慧、無為法身より顯れたるものなるが故に、広略皆実相と言われるのである。

しかるに鸞師は繼いで

「以知実相故則知三界衆生虚妄相也。知衆生虚妄則生眞実慈悲也」と出された。太陽に向かつて開かれたる眼は、万象に向かつて開かれたる眼であるが如く、浄土の実相に向かつて開かれたる智慧は、やがて、三界衆生の差別相に向かつて開かれたる眼でなくてはならない。衆生は虚妄の相に苦悩するものである。その衆生の虚妄を知れば即ち、眞実の慈悲を生ずると説かれるのである。先に述べたが如く、柔軟心こそは、浄土の実相を知る心である。浄土の実相の徳によつて成就する心である。而して、そもそも柔軟心が問題にされたのは、善功摂化の問題においてである。巧方便回向を成就せんとすれば、先ず柔軟心を成就しなければならぬ。而して柔軟心は、如実に浄土の広略相入を知る智慧、即ち実相の智慧によつて成就せられるのであるから、論には、

「如実に広略の諸法を知り、是の如く巧方便回向を成就す。」

と説かれるのである。如実に広略の諸法を知ること、即ち柔軟心を成就することとなるが故に、柔軟心こそは、巧方便回向の心である。即ち「真相を知るを以ての故に即ち三界衆生の虚妄の相を知る。衆生の虚妄を知らば、即ち眞実の慈悲を生ずるなり。」

真実の智慧は、慈悲となる。柔軟心は浄土を縁するよりおこる心ではあつても、柔軟心と言われる限り、現実生死界にはたらく菩薩の心である。であるが故に柔軟心こそは巧方便回向の心である。

誠に、実相を知るの智(後に名義撰对章に於いて説かれる、鸞師の智慧の積には、この実相を知る智慧を般若とし、「般若とは如に達するの慧の名なり、方便とは、権に通ずるの智の称なり。如に達すれば則ち心行寂滅なり。権に通ずれば備に衆機を省る。」と説けるもの即ちこれである。)は復三界衆生の之に背くを知るのである。ここにおいて、方便省機、即ち下化衆生の心を生ずるのである。衆生の虚妄を知るが故に即ち大慈悲を生ずるのである。ここに真実の慈悲とは、無縁の大悲を云うのである。

衆生の虚妄を知らば、大慈悲を生ずるのは、菩薩の心が柔軟心なるが為である。蓋し浄土より還相せる柔軟心の菩薩ならざれば、衆生の虚妄に対して大慈悲を起すことは出来ないであろう。即ち衆生は衆生の虚妄に対しては、大慈悲を起し得ないで、瞋恚、憎悪の心を生ずるものである。浄土の実相を背景として、真実智慧を成就せる、還相柔軟心の人のみ、衆生の虚妄に対して、唯大慈悲を起すのである。かく衆生の違逆虚妄に対して、瞋憎を超えて大慈悲を起し得るのは、菩薩が、浄土の実相を念ずるが故である。されば続いて、

「知真実法身則起真実帰依也。」

と説かれる所以である。

実相は真実の法身である。即ち法に約すれば実相と云い、人に約すれば法身と云う。されば実相を知るとは、真実の法身を知ることである。実相法身を知るが故に究竟の<sup>2</sup>帰依を起すのである。これ即ち上求菩提心である。如来法身に帰依することは、限りなく智慧によつて、自利満足せんとするのである。即ち願作仏心である。

慈悲はこれ利他度衆生心、帰依は自利の願作仏心、この帰依と慈悲とこそ自利を全うじて利他を成ずる処の巧方便である。是れ則ち、巧方便回向を成就するのである。菩薩は生死界に現行しつつも、常に彼岸に超越し、しかも衆生の虚妄に対しては、随順して大慈悲を起すのである。而してこの帰依と、慈悲とは柔軟心の二相である。即ち柔軟心の超越性は帰依によつて生まれ、柔軟心の随順性は慈悲によつて生まれる。この帰依と慈悲とを全うじて不離なる菩薩の柔軟心の具体的大用を巧方便と云うのである。

憶うに、衆生に対する善功撰化を説かんとせられるに当たつて、先ず柔軟心の成就を問題とせられた所以も、ここに於いて明かとなるのである。自利成就せずして、どうして利他成就があるう。自利によつて利他を成就し、利他を全うじて自利は完成する。自利利他一如の世界なるが故に、先ず菩薩は、浄土の実相法身に帰依して、自利成就して、柔軟心をおこし、備に衆生の虚妄相を知ることによつて、大慈悲をおこし利他方便の世界に出でんとするのである。

若し菩薩が、智慧による真実の自利成就なくして、衆生の為にするならば、それは凡夫の顛倒に墮し、若し法性を証すといえども、利他大悲の動を持たぬならば、二乗と言われる。ここに於いて、菩薩の世界は「如是成就巧方便回向」と言われるのであ

る。如是成就とは、帰依と慈悲とによる、願作仏心と度衆生心、即ち巧方便回向の心である。

## (2) 巧方便回向成就

### ① 巧方便回向成就の三願

論に云く

「何者菩薩巧方便回向。菩薩巧方便回向者謂説礼拝等五種修行所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便回向成就」

以上の論の文によれば、菩薩は礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念門の行を修する。而して其の五念門に集る一切功德善根に於て、三つの願あることを示される。即ち、(一) 自身住持の樂を求めず、(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、(三) 作願して一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ、と言われるのがそれである。これは後に至つて、障菩提門に於いて、智慧門、慈悲門、方便門に配されるものであつて、仏道を成就して、本仏の願意を顕現せんとする菩薩の具体的な生活の意義である。

菩薩は、五念行を如実に修行することによつて、真如一実の功德宝海を獲得する。然しその得たる福德は、決して「自身住持の樂を求め」る為にはしない。自身の樂の為にしなければ一切衆生の為にするのである。即ち自然に第二の願「一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に」が出て来るのである。ここに於いて菩薩の大慈悲の心が示されたのである。然しながら具体的には菩薩は五念行を修して、彼岸へ願生するものである。その願生道に於いて「作願して一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむ。」と、利他を成就せんとするのである。而して論主は、これを以て菩薩の巧方便回向の成就とせられるのである。

以上三つの願に於いて、(一)(二)は共に、衆生に対する慈悲であり、(三)は菩薩の帰依を示されたものである。帰依と慈悲とは、柔軟心の両面として説かれたものであつた。菩薩は帰依によつて自利成就し、慈悲によつて利他成就すと。自利利他一如の境こそ、柔軟心そのものであつた。然し自利と利他とは、徹頭徹尾相即一体のものであつて、自利を休止して、後利他するのでもなく、利他を廃して自利するのでもない。真実の利他は必ず、不断の自利によつて発り、真実の自利は利他によつて完成するのであつた。であるからこの三願に於いても、慈悲には帰依が裏付けられてあり、帰依には慈悲が裏付けられてある。法身への帰依、即ち智慧を成就しないでは、「自身住持の樂を求めず」との意は発し得ないし、自利成就しきらない者が、「一切衆生の苦を抜く」ことは出来ない。それは自ら水に溺れつゝ、人を救わんとする愚に墮するが故である。「作願して……彼の安樂仏国に往生する」と云うことは、正しく帰依によつて自利成就せんとするのではあるが、然しその願心には「一切衆生を撰取して共に同じく」と云う利他の慈悲が孕まれてある。

さればこの三願こそは、帰依と慈悲とをその内容とする柔軟心の現行に外ならない。裏がえして云えば、柔軟心は、この三願を具足することによって、真実となるのである。故に「是を菩薩の巧方便回向成就と名く。」と言われるのである。誠に巧方便回向とは、已上の文によって、還相の菩薩の具体的生活内容たることが知られるのである。

## ②無上菩提心

以上の論の文を解釈するに当たって、鸞師は次の如く説かれる。

「案王舎城所説無量寿經、三輩生中雖行有優劣莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心即是願作仏心。願作仏心即是度衆生心。度衆生心即攝取衆生有仏国土心。是故願生彼安樂淨土者要發無上菩提心。若人不發無上菩提心但聞彼国土受樂無間為樂故願生亦當不得往生也。是故言不求自身住持之樂欲拔一切衆生苦故」

鸞師は巧方便回向を説くに当たって、先ず大經を挙げられた。即ち大經下巻の初には、至心に彼国に願生する衆生の上中下の三輩あることを示し、三輩によって行に優劣はあれども、三輩ともに、「無上菩提心を發し、一向に専ら無量寿仏を念ずる」ことが示されてある。

鸞師は今、還相の菩薩の巧方便回向成就の問題を説かんとするに当たって、何故に、往相の行者の世界を示し、一切願生の行者が、悉く無上菩提心を發すことを示す文を引用せられるのであろうか。これ願生の行者も亦、二利成就することを積成せんとせられるのである。言い換えれば善功摂化已下は全て、弘願信心の徳義であつて、唯これ建章の「一心」なることを示されるのである。無上菩提心とは、願生の行者の一心<sup>4</sup>に外ならない。而して一心をおいては遂に、如何なる徳も菩薩の上には顕現しないのである。

菩提心の言は、日本浄土門に於ける一つの問題であつた。それは吉水が、その著選択集に於いてこの菩提心を以て、通途の諸行としてこれを廃捨すべきことを主張されたが故である。吉水に対する真面目なる弾劾<sup>だんがい</sup>は殆どこの問題が中心であつた。しかるに今鸞師は、この菩提心を以て、別途の安心としたまうのである。抑も、この菩提心なる語は、四十八願中、第十九願及び、第三十五願に出ており、その中前者は仮にして、後者は弘願他力の真実である。而して三輩章の菩提心の文には、この権仮と真実と両者を共に含むのである。宗祖はこれを並びとられて、化土巻には、三輩の文を以て第十九願成就文とせられ、又、今文を信巻に引用せられ、菩提心を積せられる下に用い、又成就の一念の異名を列挙せられる中に出された。

三輩とは十方衆生の生得の機品である。雖行有優劣とは、その生得の機類による善に優劣の差別あることを示し、莫不皆發とは、莫不は決定の詞、是一を示し、皆發は菩提心の平等を示す。故に莫不皆發とは、所謂同一念仏無別道故の世界に外ならない。菩提心とは、誠に願生の行者の一心である。

次にこの菩提心を積するに、三心がある。文に云く「(一)此無上菩提心即是願作仏心。(二)願作仏心即是度衆生心。(三)度衆生心即攝取衆生有仏国土心。」この願作仏心、度衆生心、攝取衆生有仏国土心の三心は、三心であるが然し、第三は度衆生心を積せられたものであつて、聖道が此土の行証を期せしむる利他に揀異して、浄土門

別途の利他心を示されたものなるが故に、宗祖がこれを御引用なさる時、唯、願作仏心、度衆生心の二心のみを出されるのも亦その為である。次に、この二心の見方に二途がある。一には二心共に仏に約するのである。

願作仏心

願作仏心

仏

信心 (衆生) 〓

度衆生心

度衆生心

二は、度衆生心を仏に、願作仏心を衆生に配するのである。仏〓度衆生心↓信心〓  
願作仏心 (願生・欲生)

已上の第一説によれば、願作仏心とは『設我得仏……不取正覚』と自利正覚成就せんとする法蔵の作願であり、度衆生心とは、衆生を撰取せんとする大悲である。この如来の願作仏心、度衆生心、そのままが、衆生の機の上に大信心を成就するのである。随つて願生の行者の信心は、その体徳としてこの二心を具足するのである。もとより行者生得の機は下品の劣機である。巧方便回向を起こすと云うともその行相としておこすのではなく、体徳として、無疑の一心に自ら其の徳を内具するのである。

鸞師は、菩薩の巧方便回向成就、即ち還相の菩薩が、生死海に還り来つて限りなく衆生を度せんとする利他方便回向成就を説くに当つて、大経の往相回向の行者の世界を説かれる三輩章の文を出されて、上中下輩共に、その生得の機から生まれる行には優劣の差があろうとも、無上菩提心をおこして念仏することに於いては平等一味であることを示された。即ち安楽国に願生せんとする者は要かならず無上菩提心をおこすとせられた。我等は菩薩の巧方便回向成就を説かんとされるに当つて、却つて願生の行者の無上菩提心を出されたことに対して深い感銘を持たざるを得ない。何故であるかと云うに、往相も如来回向であり、還相も亦如来本願回向である限り、其処には、唯一の大悲の本願が動いているのである。同一の如来の願意の表現に外ならないことを知るが故である。

即ち我等は先に、菩薩の柔軟心について、柔軟心の三つの相であるところの帰依と慈悲において、帰依は願作仏心であり、慈悲は度衆生心であり、而して「衆生を撰取して有仏の国土に生ぜしむる心」は巧方便であることを知った。しかるに今はこの三心を、往相の行者の菩提心の内容として示されたのである。「この無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち衆生を撰取して有仏の国土に生ぜしむるなり。是故に彼の安楽浄土に生ぜんと願する者は、要ず無上菩提心を発すなり。」と。この註解の文を注意して拝読すれば、純粹なる菩提心は、論の「(一) 自身住持の樂を求めず、(二) 一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に」等の文の意をその内容とすることを示されたものであることを知るのである。菩提心に於いても、巧方便回向成就の世界と同一のもの求められることを示されたのである。

然れば、利他方便回向成就せんとする菩薩と、願生の行者とは全く同一なるものなのであろうか。其の差異はないのであろうか。憶うに還相の菩薩は、利他成就せんとするものであり、往相の行者は自利成就せんとするものであつて、前者は浄土の大涅槃の証によつてやがて光より暗に大悲の手をさしのべんとするのであり、後者は、暗

を後に光の国に衆生と共に旅立んとするのである。であるから二者は全く同一ではないと言われるべきである。しかるに何故に此処では同一の願作仏心、度衆生心等の意をその内容として説かれるのであろうか。

しかるに我等は、今、「無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。」と説かれるのを見る。即是とは、同体異名たることを示されたものである。即ち願作仏心が自利利他の自利であるならば、度衆生心は自利利他の利他である。しかも自利利他の二利は遂に何物を以ても分かつべからざる一心の両面である。故に願作仏心の自利なき度衆生心は真実の度衆生心でないと共に、度衆生心の利他を持たざる願作仏心も真実の願作仏心ではあり得ない。

願生の行者は、自ら助からんとする願作仏心の人であるが故に、その一心の願生心には、度衆生心を内具するのであり、還相の人は巧方便回向成就して利他を完成せんとする人である。その利他度衆生心は、そのまま自らそれを通して、願作仏の心を満足せんとするのである。願作仏心なくして、衆生を救うと云うことは、自らは溺れつつ他を救わんとする凡夫顛倒の愚であるし、他を救わんとする意を具せずして自らのみ救われんとするは、二乗の利己心である。ここに往還二相の相違を知ることが出来るのである。

次に、我等は、論の巧方便回向成就を説ける文も、其の帰結に於いては、  
「作願して一切衆生を撰取して共に安樂仏国に生ぜしむ。」

と示され、又、願生の行者の菩提心、ひいては願作仏心、度衆生心釈に於いても、

「願作仏心とは即是れ度衆生心、度衆生心とは即ち、衆生を撰取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。」

と結ばれたことについて、深く考えざるを得ないものである。願生の行者は勿論、有仏の国土即ち彼の弥陀の安樂浄土に往生するより外に白道のないことは勿論であるが、還相の菩薩の巧方便回向成就の世界も具体的には、一切衆生を撰取して共に彼の安樂仏国に生れんと作願するより外に道のないことを示されたのである。自ら生ずる限り、願作仏心であり、衆生を撰取する限り、度衆生心と言われるのである。

ここに於いて、願生の行者といえども、自力煩惱の心を離れて、如来回向の眞実信心即ち菩提心によるが故に、その願作仏心の念々の歩みは、知らずして一切衆生の念仏道に撰取しつつ往相の一道に自利成就せしめられ、還相の菩薩も亦、衆生を撰取して願生の一道を生きると云う、往還帰一の世界を知ることが出来るのである。和讃に云く

「弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ

心行ともにえしむなれ」

又云く

「他力の信をえんひとは

仏恩報ぜんためにとて

如来二種の回向を

十方にひとしくひろむべし」

往還二相の相発は前後ありといえども、如来に於いては、一念のうちに二種を一時に回向したまうことを知るべく、鸞師がここに三輩の文を出された意も伺えるのである。

我等は、世尊、七祖、聖人等の上に、還相の相を拝するに、それらの諸聖一人として、自らは還相意識を持たず、全く一心の願生の行者として生きられたるその真意をも亦知ることが出来るのである。自ら還相意識を持つが如きは、その願生道に不純を混ざるものである。一切は一心願生道において光ること知るべきである。

真実の信心、即ち一心は、無上菩提心である。であるが故に、真実の願生者には、必ず菩提心を要とする。而して無上菩提心とは、既に述ぶるが如く、願作仏心即度衆生心、即ち自利利他一如の心であるとは、鸞師の説であり、又我が聖人の一貫せる説である。

鸞師は云う。

「若し人無上菩提心を発さずして、但彼の国土の樂を受くること間無きを聞きて、樂の爲の故に生れんと願ずれが、亦当に往生を得ざるべきなり。是の故に自身住持之樂を求めず一切衆生の苦を抜かんと欲するが故にと言えり。」と。

而して住持樂とは、「彼の安樂浄土は阿弥陀如来の本願力の爲に住持せられて樂を受くること間無き」を云うのである。

誠に浄土は安樂国と云う名が示すが如く、大樂の境である。しかるに願生の行者にして、その如来本願力住持の大樂を得んが爲の故に往生を求めらば浄土に生ずることは出来ないと言われる。それはまた何故であろうか。

憶うに浄土の樂を求めて、浄土に生れんとするものは、個我の樂を求める者、即ち樂に囚われるものである。樂に囚われるものは、その根本に於いて如来の願意を、即ち浄土の意を領解せぬ者である。真実の願生者は「自身住持の樂を求めず」「不求」と<sup>7</sup>は執着せざることを願すのである。執着心は生死流轉の凡夫の意であつて如来浄土の意ではない。

浄土の大樂は、涅槃の徳である。即ち常、樂、我、淨の樂である。凡夫執着心の求むる樂は涅槃の大樂ではなく苦樂の世界の樂であつてやがて大苦惱と転ずるものである。ここにおいて「若し人無上菩提心を発さずして」と言われるのである。無上菩提心は決して自身住持の樂を求める心ではない。如来の本願を領解しておこる純粹なる大信心であり、願作仏心であり、度衆生心である。即ち、如来の智慧海さながらの心である。

先に我等は、浄土の心とは、柔軟心であることを知らしめられた。しかるに今は又、無上菩提心と言われる。ここに於いて、柔軟心とは菩提心であることが明らかとなる。柔軟心とは、無上菩提心の本質である。

前に説かれたが如く、柔軟心は、智慧によつて法身に帰依し、慈悲によつて衆生の苦悩に同感し随順する心であつた。しかるに、智慧によつて法身に帰依するとは、願作仏心であり、大悲によつて衆生の業苦に同感し、衆生の全的運命を自ら荷負することとは、度衆生心である。智慧に依るが故に自身住持の樂を求めず、慈悲に依るが故に、一切衆生の苦を抜かんと欲するは、柔軟心である。今鸞師はかかる浄土の心を無上菩提心の上に見ようとせられるのである。

一切衆生は、仏道を修することによつて、本願力住持の大樂を得ることが出来る。しかるにその大樂を自ら得ようとししないで、却つてそれによつて一切衆生の苦を抜き、

一切衆生に樂を与えんと欲するのである。ここに於いて次に、回向と云うことが問題となる。

### ③ 巧方便回向

次に願生道が何故に巧方便回向と言われるのであるか。先ず「回向の名義」を釈して次の如く言われる。

「凡釈回向名義、謂以己所集一切功德施与一切衆生共向仏道」

施与とは回向の回であり、向仏道とは、回向の向である。然しかかる回向は、浄土門に限ったことではなくて、聖浄凡聖所修の名義を釈せられたものである。故に「凡」の文字が用いられているのであり、「共に仏道に向かう」と云うて「向浄土」と云わざる所以である。

誠に凡夫は、智慧無きが故に、我執によつて、己が所集の一切功德、それよりおこる楽果をば僅かたりとも他に漏れることを好まず、自らに於いてのみ刈取らんとするものである。しかるに真実の願生者は、仏智によつて無上菩提心を成就せるものであるが故に、己が所集の一切功德よりおこる楽果をば、これを一切衆生に施与して、共に仏道に向わんとするのである。されば回向とは、衆生に隨順する大悲を現されたものである。ここにも、真実の自利成就は、そのまま利他成就にあることを示される。而してここに別途の回向を挙げずして通途の回向を示されるのも、回向の名義は具体的には、念仏道に於いて如実に成就せられることを示されるのである。

次に巧方便とは如何なる意義を示されるのであろうか。云く

「巧方便者、謂菩薩願以己智慧火烧一切衆生煩惱草木。若有一衆生不成仏我不作仏」

これ菩薩は、自利を全うじて、利他を成ずることを明かす。「己が智慧の火」は、菩薩が自らの煩惱を断じ自ら大法を知つて自利成就する所の智慧である。しかるにこの自利の智慧の火は、そのまま一切衆生の煩惱の草木を焼き尽くさずばおかないとの利他の大悲の火となるのである。

菩薩は、仏道無上誓願成と、自らの大覚を智慧によつて成就せんとし、それ故に、智断の徳を成就せんとするのではあるが、「若し一衆生として成仏せざる有らば、我仏に作らじ」と、無辺の衆生を度せずんば、自らの成仏も亦成就せざることを示さるのである。さればこの文の中に菩薩常途の四弘誓願を拝むことが出来るのである。

この巧方便の釈は、自利によつて利他を成就し、利他によつて自利を円成せんとする還相の菩薩の願を示すものではあるが、それよりも先きに、法蔵菩薩の誓願である。本仏の本願そのものである。「設我得仏十方衆生……若不生者不取正覚」この十八願の誓願がそのまま、菩薩願ずらく己が智慧の火を以て一切衆生の煩惱の草木を焼かん。若し一衆生として成仏せずば我仏に作らじ、と現されているのではないか。されば、この自利利他一如の誓願は、本仏の誓願である。本仏の誓願なるが故に、還相の菩薩の上に現れるのである。還相の菩薩は如来の願として生死界に生きる人である。



我等は念仏して往相位に立ちつつ、この還相の意を聞いて深い内観にさそわれるものである。而して往相位の無上菩提心を提出して、その上に体徳として二利成就を見んとせられる鸞師の意に限りなき感銘を受けるものである。

因清浄に非ずして如何にして果清浄を得ることが出来よう。行者の無上菩提心と云い、菩薩の柔軟心と云い、共に如来本願の回向表現である。

しかるにここに一つの問題がある。菩薩は自利利他一如の世界にあつて、自利によつて利他を発し利他によつて自利を成就すると云わば一切衆生が業苦にある限り、自利成就して成仏することは出来ない筈である。ここに於いて鸞師はこの問題を提出せられる。

「……菩薩願ずらく、己が智慧の火を以て一切衆生の煩惱の薪を焼かん。若し一衆生として成仏せざる有らば、我作仏せじと。而るに衆生未だ盡く成仏せざるに、菩薩己に自ら成仏せんは」

これ誠に万人の聞かんとする重要な問題である。法蔵菩薩は、五兆の願行に於いて、「十方衆生若し生れずば正覚を取らじ」と誓い、無限の衆生とその内的運命を共にすると宣言しつつ、一切衆生未だ成仏せざるに、無限の生死海をさしおきて十劫に既に成仏したまうと説かれるは何故であるか。このことは、一切菩薩、還相往相の菩薩、全てについて言われることである。而もこの問いに対する鸞師の答えは、明瞭にして簡単である。云く

「譬如火テン欲摘一切草木焼令使盡、草木未盡火テン已盡。以後其身而身先故名巧方便」

今更に鸞師の智慧海に合掌して崇仰の誠を至さざるを得ない。「以後其身而身先故」と僅かに八文字を以て、この困難なる大問題に答えられたのである。其の身を後にする者は一切に先んずるのである。鸞師はこの八文字を領解せしめんが為に、智度論十八の譬を転用して、一つの譬喩を説かれるのである。

「譬えば、火テン一切の草木を摘んで焼いて盡さしめんと欲するに、草木未だ盡きざるに火テン己に盡きんが如し。」

木にて造れる火箸（火テン）を以て草木を焼きつくさんとするに、草木を盡さざる先に火箸そのものが焼きつくされたが如きものであると言われるのである。この譬喩を法に合すれば、火テンとは菩薩であり、草木とは衆生であり、焼とは利他であり、先盡とは自利である。

真実の利他は、自然に自利を成就することを示されたのである。一切衆生を利他せんとする大慈悲は、一切衆生よりもさきに、先ず菩薩そのものを救うのである、一切を焼かんとする火は、他を焼くより先に自らを焼くのである。専ら利他を行わずれば、任運に自利を成ずる。これ全く順菩提門の行なるが故である。この隨順菩提の利他を巧方便と名づくるのである。凡夫は、利他を以て、損失と考える。利他を以て自損となし、横に利他ならざる自利を得んとするが故に、却つて自損の世界に墮落するのである。真実の利他は決して、自損ではない。真実の利他こそ、よく自利を成就する。自利利他の利他のみよく自利を成就する。これを巧方便と名づけられるのである。利他にして若し自損をまねくならば、決して巧と云う文字は用いられない。利他が自

利を成就すればこそ、利他を巧方便と言われるのである。利他が自利を成就するのは、巧方便よく菩提に順するが故である。身を後にして而も身先んずるを得るのは順菩提の行なるが故である。これ全く菩薩の巧方便回向である。菩薩は自利によって利他する。而も、自利は唯無限の利他、永遠の利他によってのみ成就する、この自利利他の利他を巧方便回向といわれるのである。

猶この以後其身云々の文はその語を老子に採られたものである。老子七章に云く  
「聖人後其身而身先、外其身而身存」

次にこの巧方便回向を別途に約して釈す。

「此中言方便者、謂作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。彼仏国即是畢竟成仏道路無上方便也」

通途に示された成仏道（自利利他一如の無上菩提）は願生道に究竟じられてはじめて如実に成就する。

「共同生彼安樂仏国」これ自身住持の樂を求むるに非ずして、衆生を撰取して仏国に生ぜんが為である。仏国は自利利他一如なる本願によって莊嚴されたる世界であつて、彼国に生ずれば、彼土は畢竟成仏の道路であり、無上の方便なるが故に、自ら方便の功を勞せずして、任運自然に、菩薩行成就するのである。畢竟とは、広門に約せば果遂の義であり、略門に約せば、決定の義である。彼の仏国は決定成仏の道路である。道路とは能通の義である。即ち浄土に生ずれば、即ち仏果に通ずるが故である。無上方便とは、方便とは、施造及び進趣に当たる。仏法中、成仏の方便は無量なるも、願生道を以て最勝とするが故に、無上方便と言われるのである。